特42
850

205341-000-3

特42－850

宮本無三四二刀伝（実説双紙）

隅田園　春暁／編

M17
EDV-0525

# 叙

武蔵小傳にいふ宮本無三四は勢力強大なして常に七八十人の門弟を引供し國中を往來するに乘掛馬に跨がり鷹を据させたりと因て岸柳無三四と試合せんとして小倉の島へ渡らんと欲する際に船中の乘合者これを知り止めて云ふ無三四一人往かば恐らくは怪我あらん岸柳答へて我既に彼と約せりと遂に其場へ往たりと然れども此説大いに他の言所と異なり爰に於て隅田園氏なる人之が實説を探り果して此本傳を得て今此處に掲げ配せしは一幹の筆の鋒を机上に揮ひ二刀の奥旨を開き極めし者と實せんか噫

梅亭金鶴識

實説双紙

# 宮本無三四二刀傳

隅田園春曉　編輯

## ○第一回

志士い其元を喪ふ事を忘れを朝ふ萬鐘の富貴と受夕に一箪の窮厄と經るも恬乎として顧ずとなん爰に寛永年間武名を海内に輝かせし神免二刀の流祖と仰がれける宮本無三四政名といへる其人の遠く先祖を尋るに吉岡鬼一法眼の末葉たり父い伊豫の國の住人にして其名を太郎左衛門と云ひ號を無二齋とあん云り幼稚の頃より武藝お心を委任切瑳琢磨の功を積で遂ふ眞蔭流の極意を見破り自ら吉岡流の一派を弘む此太郎左衛門に二人の男子あり兄を清三郎と稱び弟を七之助と云ふ兄清三郎い多病の性質ゆゑ武藝を勵む氣力薄く腕前左のみ上達爲ざれ共弟七之助い器量骨柄父に增り且武藝を好み實に旃檀い二葉にして其香高しとかや年僅に十五歳なれども劍法い父の極意を學び得てけれバ天晴世に名と成るべきの强傑あり と太郎左衛門も意の中に末頼母しく思ひ暮しなり頃しも春の半ばるが七之助松山の城下へ赴きしに街の傍お五軒間口とも覺しき道場を擇へ表に大きやかある金看板を標げ日の下開山比類の劍學有馬流の元祖有馬喜平治藤原の光信と記せり七之助夫と見るより扨も世にい高慢增長の奴も有物かな天下とひろし名人數多く在べ爰お我より日の下と名乘い大膽とやいはん愚とや言とん井の中の蛙大海の廣きを知らずとい此奴等の事を諺る成べしと心憎く思ふ餘り傍ょ有合泥を以て美麗ょ塗輝かしたる看板へ井中蛙大海不知と書て其儘立去るを有間喜平治少しも知らず居たりしが夫と告し者の有しに依り喜平治甚く憤り我名

前へ泥と塗しい憎むべき小童あり何奈で此儘捨置べきやと門人等にも示し合せつ待構へて居るとい知らず一二日過て七之助有馬の家の前を過んと爲しを早くも見認め門人に云付强て七之助を稽古場へ呼入させ我流名を泥土に汚せしい言語に絶たる爲業なり思ひ知れやと木剣以て七之助の頭上ゑ打んとあしけるを左い爲せじと七之助体を轉じて空を打せ倭僞處を突と付入り拳を堅めヤット一聲掛ながら急所を擋れバ喜平治堪らずアット叫びて氣と失ふ門人夫と見る否や師匠の仇遁すまじと得物とり〳〵大勢が打んと爲るを七之助い己の無事と思ふ故其儘に外面を差て逃出るを遁しい遣らじと追駈來る折しも此處へ通り懸りし加藤家の臣宮本武左衛門が情に依り有馬の門人を追退ぞけ委細を聞バ救ひしい師匠と仰ぐ無二齋の二男と聞て大きに驚き直地に七之助を伴ふて吉岡の家に赴きたり

## ○第二回

偖も武左衛門い七之助を倶して無二齋の家ふ至りしが武左衛門未だ家を讓るべき一子あきを愁ひ居たりしかバ無二齋に乞ふて七之助を養子となして熊本へ戻りたり元來七之助い忠孝の道を守るの性あれバ養父武左衛門へ優しく仕へけるゑど武左衛門い武藝といひ器量勝れたる天晴能豚兒を得たりとて其喜悅大方ならざりける係る處へ無二齋より今般毛利家へ召に預り師範役を仰付られ高祿を賜て何不自由なく世を送る由報知有しかバ重疊の喜悅を祝し會ける為が世に定がたきい人の身の上にして降かゝる災禍い免れ難き物にや有けん爰に佐々木久三郎と言る一個の劍學師有つるが元來奸佞邪智の曲者あれバ大家へ奉仕して高祿を貪り榮曜を尽し己の我意と震いんとするが儘ゑ諸國を廻り天正の末卯月の頃中國へ來

りう毛利家に仕へんと其筋へ入るゝ毛利の大守輝元公い武と好き玉ふの君あれバ早速久三郎を御前に召れ渠が骨柄を御覽ありけるに脊高く鬼髭半面ゝ生じ眼藍〳〵として自然一個の勇士とも見へけれバ武藝の有無を試みて後召抱んと思召にぞ翌日吉岡無二齋へ命せられ廣庭にて立合せしむるゝ老躰ありと雖も無二齋い古今の名人何かい以て及ぶべき久三郎見苦敷も劣を取しかバ輝元公無二齋の手練と實美し給ひ久三郎にい僅ある御手當金を賜りしのみにてお暇と成げれバ己が未熟不達練なるをも顧みず佞奸者の性として己れ吉岡太郎左衛門此意恨を報いでや置べきと吉岡の出入の油斷を伺ひける斯る仇人の有とい知らぬ無二齋ハ五月雨打續く長の日の徒然と慰んと眞言宗ある眞閑寺の住職い碁敵の懐友あれバ彼寺院へ到り夜の更るとも忘れて碁を囲み面白く遊びゆるうちに降續きたる梅雨も珍らしく晴て光々たる月かげ高く昇りしを見て時刻いたく過たりと思ふをり八ツの太鼓鳴響きければ驚き暇と告て眞閑寺を立出つゝ馳走の酒の酔を發し足元亂しつ小音に謠て歩み來る城下離れし松並木今や遲しと木蔭に忍び待設けたる久三郎二足三足遣り過して聲を

も懸ず背後より太郎左衛門の肩先三四寸ばかり切下れバ不意を討れて堪るべきアット一聲吉岡が尻居に樓と倒るゝ所を仕濟したりと二太刀三太刀切付つゝ忽然止めと刺貫き是にて恨い晴たりと久三郎一人笑しゐ何處ともなく立去たり流石名舉の吉岡あれども天運こゝふ尽たるかもろくも久三郎の刀に罹りて横死と遂しい傷ましき次第なりき

## ○第三回

爰ゝ宮本七之助い實父無二齋が横死の報知を聞と等しく養父武左衛門と倶ゝ中國へ到り兄清三郎ゝ面會して其樣子を尋るに同藩溝口某

の僕七助と言る者其夜其場に通り懸藪蔭に隠れて見認めしが無二齋殿を闇殺せしい佐々木久三郎に相違あしとの知らせに當の敵い判然たるど清三郎い病身故大守輝元公へ仇討の願を願へども聞濟無之何如い爲んとの物語り故七之助い己と思案を定め亡父の跡懇に佛事を濟し武左衛門と俱ゑ熊本へ戻りしが何卒實父の仇を報んとの心底あれバ養父へ相談の上主君忠廣公へ仇討あさんが爲ば暇を願し所假令實父にもせよ他家の臣あり其仇討と有てい許し難し劔道修行とあらバ三ケ年の暇を取るべき旨ば沙汰在げれバ七之助い大主の仁情を有難く心得諸國修行と號してば暇を願ばけるゑ早速許容ありてば暇を賜り志津三郎の一刀並びに金子一百兩を添て賜るにぞ仁惠の忝なさを拜謝あし七之助改めて無三四政名と名乗旅の用意も充分に整ひ天正十九年七月の末つ頃熊本と發足あし周防に赴き兄清三郎に面會して仇討發足の由を物語亡父の墓詣を爲してのち周防を立出しが久三郎の行衛を探り求めつ日を重ねて備前へ到りけるが不途も人の噂み聞バ播州姫路の城内に佐々木劔道齋岸柳といへる者ありと聞扨い久三郎改名して居んも斗り難し兎にも角わも彼所へ到りて其



實否を糺べやと播州に赴き姫路の城下に宿を求め岸柳の樣子を尋るに敵久三郎に紛れあり容体あり猶委しく聞合せし處頃日諸國修行と出られしが來春い歸國すべしとのとあるにより然バ當城内に入り込とり岸柳の歸國を待受敵久三郎ゑ相違あけれバ父の鬱憤を散ずべしと思案し門伊勢の神職の子ありと言ひれて宮田七之助と偽名なし木下家へ足輕奉公に住込月日を過しけるに此足輕の勤として天守の番をするが役目なりしが此頃怪敷事のみ多く有けれバ人々此天守の頂上に祭れる小城部明神の崇り成べし抔と盲傳へ恐怖て夜詰の

役を譲り爭ふて居るにぞ無三四心中ゐ笑しく思ひ何條然る故の有んや夫れ狐狸の爲る業とこそ思いるれ我速ゐ其正体を見届け諸人の疑惑を解難を除て呉べしと或夜天守の頂上ゑ登りて見れバ絶えて人の登らざるが故に蛛網夥しく張詰陰氣充滿て物淋かり然ども大丈夫の無三四なれバ更ゐ恐怖風情なく神前に頓首拜を遂たるうへ見届し證に爲んと供へありける神酒徳利を一個袂ゑ入て立去んとする後に微しき聲して無三四暫し待ねと止むる者あり偖ころ變化ごさんあれと振返り刀の鯉口緩げつゝ彼方を屹度白眼たり

## ○第四回

係る折から正面の簾引揚つ立出るい最も貴重き一個の官女にて右手に一振の短劍を携え無三四と近く指招き你が大丈夫の心ゐ愛て此寶劍を得すべし我い小坂部明神なり夢々疑ふとゐかれ將又劍を我より得ると必ず他言すべからず最大切に秘藏ゐせよと言ふかと思へバ官女の姿忽然消て見えず成ぬ無三四い奇異の思ひを爲しつゝ貰ひ得たる短劍を懐中に藏め詰所へ下りて神酒徳利を同役余人の目に觸る所へ差置けるが二三日を經て家老雨森縫殿介殿より急の呼召成とのと故何事やらんと到りて見るに此頃大主勝俊公が秘藏せらるゝ寶劍紛失して行衛知れず諸方詮義の折から其方が彼劍を所持する由訴る者ゐりて明白ゐり何奈して是と所持するや包ず申べしと糺問せられけるにぞ七之助遽く驚き偖い狐狸の類我へ難を負せんと謀りて彼劍を與へし者かアラ覩立しやと始めて欺れしを遺恨思ひしかバ有し次第を具に物語ければ縫殿介も七之助が人品骨柄賤しからず心の潔白自然と面ゑ顯れたれバ左も有べしとい思へども證據あけれバ申開き立難く大主へ斯と言上するゐ勝俊公七之介

の大丈夫なるを聞し召れ何か大望のある身の上よて有つらんとは監察在せられ七之介を雨森へ預とゞ成されける然るゆ七之助ハ父より眞陰流と學び又養父武左衛門より一刀流を學びし故兩流全からゑめんと思ひ幸ひ左利の性なると以て左右ゆ劔を揮と自在あれバ自ら二刀流を工夫に及びたり雨森縫殿介ハ七之助の劔學秀しを覺る故足輕共へ劔法師範を頼みしに依り是非あく七之助承引して是より足輕へ劔學教導を傳へける處家中の壯士も二流の徳あるゞと知り追々頼入て指南を受る者少あからず或日城下ある安祥寺の小性中山金吾といへる美少年來りて入門せしが其實ハ天守の頂上ゆ年久しく住所の悪狐よて無三四を失ハんと姿と化して夜毎に來つるなれバ無三四彼が爲に大きに難義をせしが琵琶道人來りて授け賜ひし三千年を經し琵琶の古木の異徳よ依て遂に其悪狐の正体を見顯して退治せしより劍紛失い悪狐の爲業と知れ大主の疑念も晴て白日晴天の身といありにけり

## ○第五回

經る月日に關守なく疾其年も暮果て鶯の初音と告頃といなりける却説佐々木久三郎い無二齋と討て立退き諸國と巡りしが途ある岸邊に炎暑を除んと柳の大樹に腰打懸思いず睡りを催す折節己が面部を打ものゝ有けれバ驚き覺て能く見れバ柳葉風に靡きて當りしなり是と見て劍道の奥義と悟り得ッ名を岸柳と更め夫より姫路の城内に住込けるが再度諸國修行に出つゝ撫返しの早業を究めて後姫路に歸り勝俊公の前にて早業手練を覽に入ける故勝俊公日頃渠が佞辨に欺れて居さゑへバ岸柳を又と無き名人ありと賞美あらせられけるに ど七之助と岸柳と試合といたさせ何方か其術の勝れるやと試し見んと思召れ早速兩人に沙汰ありける岸柳い七之助の手練を聞及びとても尋常の手合ゆてい覺束あしと思ふにぞ卑怯よも木劍の中へ分銅附たる鎖と仕込しを携へ出て試合ゆ及び見苦敷勝を得たるよより七之助い其卑怯なる振舞を怒り再度の試合を願ひしに勝俊公岸柳を愛したまふが故億を負りあがら再度の試合を望い不屈者ありとて組子に命じて七之助を捕押んとし玉ふよぞ七之助詮方あく奚を退れて再度渠を討べき思慮を巡らさばやと大勢を蹴散し突飛し難なく城内と退れ以前是輕に住込節世話に成たる宿屋次郎兵衛方へ到り預け置たる品々を取戻し身支

度して大坂まで退れけるが餘りに心急し故金子の貯へを忘れ來りなれば殆ど當惑せしが程近き所に一人の劍學師ありつる由を聞出しければ其許へ便りて一泊一食を頼んと尋ね行て見れば白倉傳吾衛門といへる人あり無三四頓て玄關に懸り案内を乞ひ武邊修行の者あるが仮手合と願ひ度と申入るに白倉早速聞濟慇此方へと取次の者の案内に連て打通り白倉ゐ面會して不慮の災難に路用と失ひ甚だ難義仕れば一飯一宿の御情を蒙り度と頼入るに白倉の曰く我家の規則として試合を爲しての期ならでは承引難しと申にぞ強て乞得て空腹を補ひ其後試合して門人始め源吾右衛門まで委く打居ければ白倉大きゐ驚き其恨を報んと思ふが故態と無三四と己が家に留め師匠と仰ぎて日々教導を受にける無三四は深き巧あるとは知らぜ渠が望に任せて此所に足を止め深切に教導をなしつゝ日數を過しけるに或日源吾右衛門無三四に對ひ我等今般浴風呂を造りしが今日風呂開きをいたし度先生何卒湯加減を仮試み下さるべしとやにぞ無三四何の心も着ず夫は添なしとて白倉が志しと犒ひ入浴なしつるゐ豫て白倉謀計にて無三四を湯風呂の中へ欺き入て失んとの巧みなれば表より堅く鎖して頻りに熱湯をつぎ込ひ故無三四堪へ難く水を乞へども聞ぬ振して益々熱湯をさすにぞ無三四戸口を明て出んと爲るに更に動かず白倉の聲として無三四殿心よく湯風呂の中よて往生したまへと悪口するを聞より無三四は謀計に陷りしを憤り風呂を破んと爲れども堅固に造りしとあれば何かゐ動かず流石の無三四も困じ果しが心の内に南無八幡大武神此危難を救しめ賜へと一心ゐ念じつゝ金剛力を發して曳那と押ばさしも大丈夫に造りし湯風呂も忽ち無三三板の楽板放れなれば無三四得たりと跳り出怒れる余り楽板を打揮白倉始め門人數多

を打殺す斯る所へ此家娘糸萩が無三四の衣類大小を携へ來り跡搏ずと退れ賜へはや疾々と深切に勸る言葉よ無三四ハ喜悅娘の厚志を謝しつゝも身支度してゞ退れ去ぬ

## ○第六回

夫ハ偖おき岸柳ハ勝俊公を佞弁にて惑し卑怯の勝を得たれども雨森が眼力に謀斗を見顯され姫路を追放せられて詮方なく門人青山文平内田左吉の兩人と引連中國を離れて九州ゑ渡り手蔓を求めて豊前小倉の城主小笠原左近將監殿へお召抱とありて威勢を振ひけるが無三四ハ斯と知らざれゞ再び姫路へ密に到りて忍〳〵様子を聞ば岸柳ハ追放されて行衛知れずとのゝ故詮義の便りを失ひしが闘口彌太郎の話に小倉に居由聞々れゞ大きに喜悅夜を日に次で豊前の小倉に赴き問合するに正しく岸柳その名と官太夫と更め居由分明なりけれゞ舊吉岡の家に仕へし五郎兵衛と云る者此小倉の街に宿屈渡世をして居るを幸ひ渠を頼み小笠原家へ讐討の義を願ひけるに左近將監殿岸柳の無道と憎みたまひ早速ゆ許しい有けれども敵討の免狀有ざる故表向に眞劍の試合と号しゆ領分内ありける灘島に於て勝敗を決すべし



とのゆ沙汰ありけれゞ無三四ハ小笠原家のゆ取斗ひを有難く思ひ心搏して待けるに疾其日に成けれゞ小舟に打乘り灘島を打渡れゞ卑怯未練の岸柳も今更退れ難き場合と覺悟と定め前日より心に工風を巡らし無三四と欺き討んとの所存なれゞ同じく小船に打乘灘島へ渡りたり此日ハ小笠原家の家老の計らひとして領分と巡見すると云觸し數艘の舟を海上に浮べ島の巡りを警固して兩人の勝敗何奈ぞと見分ゆらせられけるハ最晴がましくころ見ゆた

りけれ」岸柳の門弟共ハ師匠へ助太刀あさんと爲しけれども警固厳しく許されねバ悩悶と
して歸りけり偖も兩人ハ襷十字に綾あしつゝ支度十分に調ひ岸柳ハ太刀を抜放して立向へ
ば無三四ハ櫂を半より兩断ゐ切折右左に携ゑ天地に擎えて進み寄り互ひに暫時白眼合て機
合を伺ひ居たりけるが何奈成透の有たりけん岸柳一聲かゞあがら真向より切下す無三四心
得たりと十字あてがつきと受留左へ流して打込と岸柳また丁と受是より互ひに上段下段秘
術を盡して打合ふ休ハ花に戯る螺島の飛かふ体あとあらず暫時勝負見へざりしが岸柳諷退
て打込一刀を無三四左りに受流し右にて撥しと打込を岸柳受損じ眉見を去たゝか打破れ尻
居に動と倒るゝところを得たりと無三四櫂投捨一刀引拔打んとす此時疾く岸柳身を起すよ
と見へけるが曳と聲のけ横に拂ふ吐嗟ヤ無三四が兩足ハ切きたらんと思ひの外ひらりと
空へ飛上る岸柳仕損じ殘念とひるむ所を飛下りさま肩先より乳の下懸ばらりづんと切下て

倒るゝ所と首打落し首尾能く本懐と遂たるハ實ゑ勇しきとともありし扨具后加藤家断絶に
及びしかゞ武三四ハ一端泯人あしゝを小笠原侯懇望し給ひ强て家臣になし給ひぬ武三四其
後名を源心と改め八十余歳の天壽を保ちて愛たく畢を遂しとあん斯れバ武三四が仇討せし
灘島を岸柳島と呼替つゝ今の世にまで宮本が其功賞と賞しげり

實説
双紙
宮本無三四二刀傳 大尾

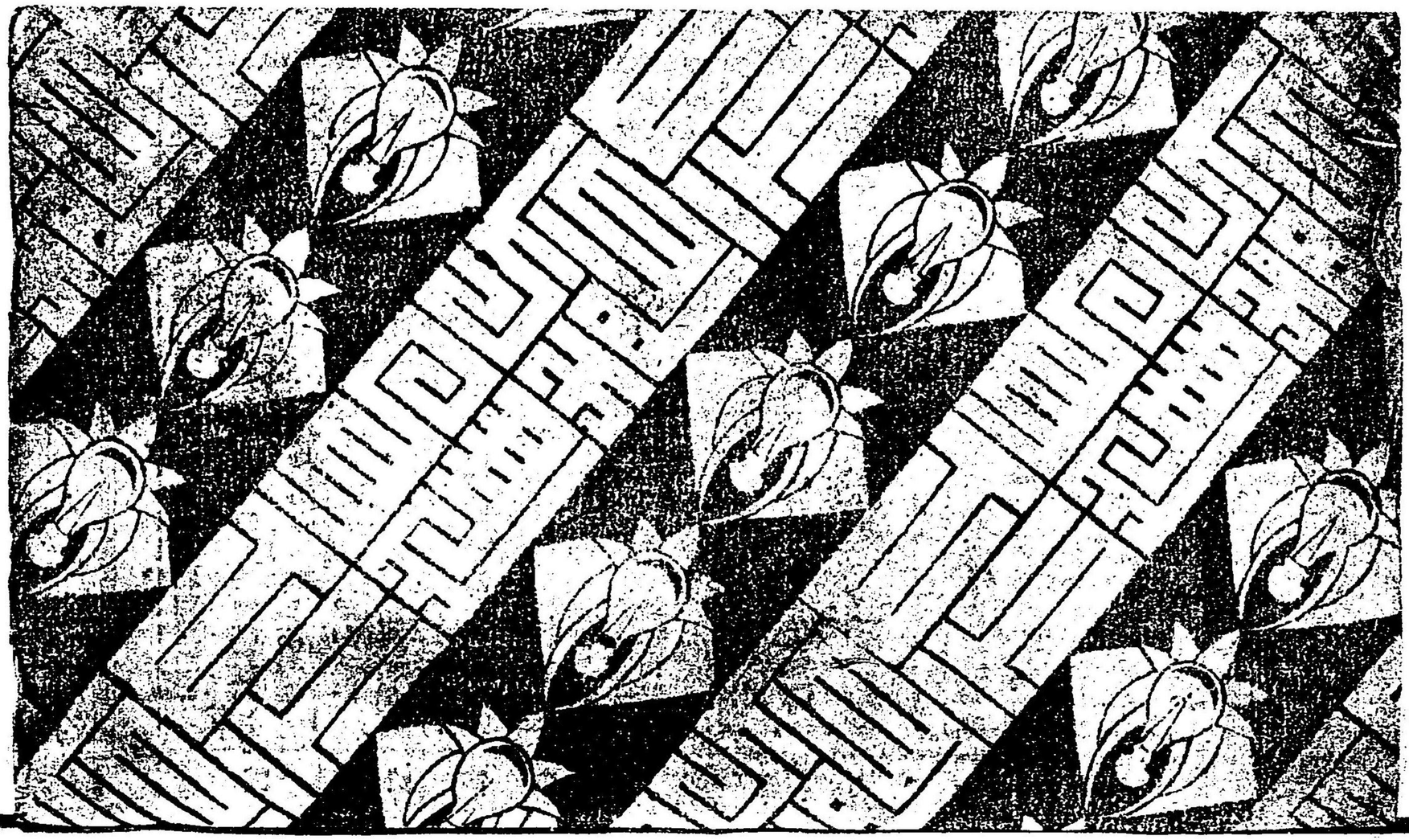
明治十七年一月廿日御届

編輯兼出板人　東京府平民　森仙吉　日本橋區横山町貳丁目十六番地

定價四錢

東京賣捌　辻岡屋文助
同　大黒屋平吉
同　山口屋藤兵衛
同　藤岡屋慶次郎
同　丸屋鐵治郎
同　嵯峨野増太郎
關西賣捌　岡島支店
東北賣捌　木村文助

# 實記双紙出版書目

錦聲社

一大岡天一坊政談
一同村井長庵政談
一同畔倉重四郎政談
一同越後傳吉政談
一同松田於花政談
一同水呑村九助政談
一伊賀越仇討
一龜山孝子仇討
一天下茶屋仇討
一白石孝女仇討
一鶯塚孝子仇討
一伊達顯秘錄
一佐倉義民傳
一船越重右衛門物語
一佐野次郎右衛門物語
一慶安太平記
一寛永箱崎文庫記
一中山問苔記
一名譽紀文一代記
一天草大禮記
一北雪金澤美談
一松前屋五郎兵衛記
一宇都宮隆勳記
一彦左衛門一代記
一水戸黄門一代記
一皿屋敷怪談
一雞田波三大戰記
一眞田三代記
一石山軍記
一豐臣鎮西軍記
一滑正朝鮮軍記
一佐賀怪猫傳
一日蓮上人御一代記
一親鸞上人御一代記
一祐天上人御一代記
一弘法大師御一代記
一中條姫一代記
一小野小町一代記
一魁神於松一代記
一休諸國物語
一尼子十勇士傳
一高尾常右衛門物語
一毛谷村六助物語
一石川五右衛門一代記
一高田馬場義士譽記
一川中島大戰記
一我朝勢弓記
一寶物語
一小栗判官一代記
一鈴木主水物語
一鏡山お初仇討
一お半長右衛門物語
一於旬傳兵衛物語
一國定忠次物語
一四谷怪談
一阿波鳴戸順禮記
一梅川忠兵衛物語
一お七吉三物語
一お染久松物語
一花川戸助六物語
一於三茂兵衛物語
一三勝半七物語
一梅若松若一代記
一小野道風一代記
一將門一代記
一木曾義仲一代記
一義經辨慶一代記